兵庫県淡路島北淡地方の力石

伊 東 明*

(昭和42年11月24日 受付)

Chikara-ishi (Stone-lifting) in Awaji Isl., Hyōgo Prefecture

Akira Ito (Sophia University,)

The weight-lifting game by using stone is played in the mountain areas in Switzerland and Spain. Also in Japan, it has been played among the people since the Edo era (1603 ~1867), and it was called "chikara-ishi".

Such chikara-ishi' is now found here and there at shrines and temples in the northern part of Awaji Isl., in Hyōgo Prefecture. Those who did this stone-lifting were the young men named "otoko-shi".

In summer, in the evenings, when their work was over, they gathered in a meeting place or a shrine or the ground of a temple in twos and threes and they competed for strength by lifting or practiced carrying stones. But as the change of social structure brought about a decline in the number of people of the "otoko-shi-class", labor became mechanized and the way of recreation was changed, and stonelifting has ceased to be played and only the reminiscence of the past are shown in monuments.

(Research Journal of Physical Education, Vol. 12, No. 4, 221~225, 1968)

はじめに

淡路島の各地に力石が在ることは、津名町在住の田尾栄一氏の談話によつて知られていた。

今回調査したのは、淡路島北部の津名郡下の津名町^{イナホ}生穂部落、長沢部落、一宮町の多賀部落の一部である。

北淡路の力石の所在と状況

津名町生穂 賀茂神社の力石

力石の状況

切りつけ「奉上 賀茂力石」

大 き さ 56cm×43cm×30cm

材 質 黒みかげ石(金石)

形 状 小判型

力石の特長

「切りつけ」に重量の表示がない。しかし、これを持ち上げた人びとは、恐らくこの石が何貫目あるかを知っていたのであろう。また「金石」と称する黒みかげ石の力石は、淡路島北部

兵庫県淡路島
賀茂神社 力石

70cm×50cm×30cm

* 上智大学 体育学研究室

では珍しい。

力持ちの行なわれた年代

賀茂神社宮司の書簡によれば、大正初期までは行なわれていたという。

賀茂神社は、播磨灘に沿った生穂部落の氏神で、氏子中の力持ちが奉納したものであろう。

賀茂神社境内には3箇の力石があつたというが、「賀茂力石」だけしか確認できなかった。

津名町長沢 金山比古神社の力石

力石の状況

金山比古神社の玉垣内、手洗石の横に、半分ほど土に埋もれて、3箇並べて置かれている。

材質は全部、みかげ石である。

切りつけ 「三十メ」、「三十三メ」、「四十メ」

大 き さ 55cm×40cm×30cm, 60cm×45cm×35cm, 70cm×50cm×40cm

形 状 卵円型

力石の特長 重量の切りつけがあるだけで、奉納、年代、人名ははいつていない。以前は数箇あつたが、昭和40年の水害の際、神社の下の道路の補修のために、3箇を除いて他の力石を埋めてしまったという。

金山比古神社は、旧長沢村の氏神であり、祭礼の時には、若者達によつて相撲と力持ちが行なわれた。

長沢部落の仲野氏の話によれば、力持ちは村の青年達の間で、大正中期まで行なわれたという。

津名町東山寺 平生山東山寺の力石

力石の状況

東山寺仁王門の脇に、刻字を上にして置かれている。

初りつけ 「奉上 力石 三十四メ」

大 き さ 55cm×43cm×30cm

材 質 金石（黒みかげ石）

形 状 角ばつた橢円型

東山寺主、佐伯秀明尼の談話によれば、大正初期には、境内にこのような力石が5箇あつたが、現在では1箇しか残っていない。

津名町長沢 西下大師堂の力石

力石の状況

西下部落の大師堂の沓脱ぎ石として使われている。

切りつけ 「八十メ」

大 き さ 61cm×49cm×30cm

材 質 金石（黒みかげ石）

型 状 小判型

大師堂は部落の青年集会所となっており、以前には2～3箇の稽古用の力石があつた。「八十メ」石も稽古用のものであつて、沓脱ぎ石に使われているため、刻字も磨滅している。

一宮町多賀 伊弉諾神宮の力石

力石の状況

伊弉諾神宮境内の西門鳥居脇に1箇と、本殿横の倉庫前に1箇放置されている。

1. 「瀬岡」石

切りつけ 「津名郡郡家村」瀬岡虎吉」
 「昭和三年四月二十一日津名郡郡
 家町 谷住竹松」

大 き さ 70cm×45cm×35cm

材 質 みかげ石

形 状 卵円型

「瀬岡」石の特長

力石の典型的な形に整形してある。

正面の切りつけには「郡家村」となり、側面のは「郡家町」となっており、時日の経過を表わしている。「奉上」「貫目」の切りつけはない。

力石の持ち上げた人

切りつけにある「瀬岡虎吉」は郡家町の人で伊弉諾神宮の氏子とだけで判明しない。

長尾書簡によれば、瀬岡は、この力石を『肩まで揚げるか揚げない程度で落したと云われている。』

「谷住竹松」は、郡家町北山に生まれ、大阪第四師団司令部勤務中に師団の軍刀術競技会で一等賞を獲得した。昭和3年4月21日、伊弉諾神宮例祭当日、境内において、五十三貫の力石を肩に担ぎあげ、その場を数回まわった。しかし、この後1,2年して腹膜炎にかかり、2,3年病臥後、数え年29才で死亡した。存命すれば数え年64才であるという。なお、腹膜炎の原因となつたのは、力石を担いだためであつたろうといわれている。

2. 練習用力石

切りつけ なし

大 き さ 60cm×40cm×38cm

材 質 みかげ石

形 状 自然の玉石

特 長 伊弉諾神宮の祭礼用の器具などを納めてある倉庫の前の草むらに放置され、タールで汚れている。長尾禰宜の談話によれば、練習用の力石であつた、といわれている。

北淡路の力石についての考察

1. 力石の特長

北淡路の力石は、神社や仏閣の境内に置かれ

てあるだけでなく、部落の青年会の集会所に、練習用の力石があることであろう。長沢部落の仲野氏の談話によれば、このような力石は、大正時代から昭和の初期までは、部落ごとに必ず力石があつたといわれている。

練習用の力石は、青年会だけでなく、神社や仏閣の境内にもあつた。通常、切りつけがないが、単に目方が刻んであるだけである。

正式の競技用の力石は、東山寺や賀茂神社の力石に見られるように、「奉上」の刻字があり、江戸などの力石に「奉納」と彫つてあるのと同じ意味であろう。

2. 力石の年代

北淡路の力石で年代が明確に彫つてあるのは、伊弉諾神宮の「瀬岡石」だけである。その他の力石には、年代を推定し得る切りつけ、記録は一つもなかつた。しかし、北淡路で力石による力持ちが行なわれた年代は、江戸時代の後期から、大正年代の終わり頃までが最盛期であつたようである。

3. 力石の形状

卵円形または楕円形のものが多く、力石としての典型的なものが多い。しかし、練習用力石では伊弉諾神宮の力石のように、自然石の形の整つたものを当てている。

大きさは、長径 55cm から 70cm、短径40cm から 50cm、厚さ 30cm から 40cm のものが多い。

4. 力石の材質

淡路島北部は、兵庫県や岡山県の山陽地方と同じ花崗岩地質の地帯であるため、力石も、みかげ石で作られたものが多い。

また、色の黒い、石質の緻密な「かな石」と称する火山岩の力石もあるが、この「かな石」は、洲本、三原の淡路島南部で産する石であるという。

5. 力石で力持ちを行つた人びと

力石を扱つた人びとは、農家の若者、とくに「男衆」（おとこし）と呼ばれた農家の下男階級の青年達であつた。

北淡地方は海岸近くまで台地が張り出してい

て平地が少ない。そのため、斜面は段々畑の水田になつている所が多い。全ての農作業は、農具にしても、肥料、収穫物にしても、まづ担いで畑まで上り下りしなければならない。ものを担ぐための「力」は、全ての労働の基礎となるものであつた。」

事実、男衆は、玄米8斗入りの畚（ふご）を担いで家から田へ、あるいは街へ出ることは、日常茶飯事であつたといわれている。

このような「力」を必要とする生活環境から、当然「力競べ」「力持ち」が生れてきたのであろう。

中でも、いちばん「力」を必要としたのは、力作業が生活の基盤となつていた階層、即ち男衆であつた。男衆は雇傭主である地主の家に部屋を与えられ、農繁期には野良仕事ばかりでなく、夜が長くなると、夜なべ仕事までもさせられた。冬になつて、全く農作業ができなくなると、畚を担いで対岸の明石や、阪神地方へまでも出稼ぎに行く男衆も多かつた。そして、春ともなると、また淡路の地主の家へ戻つてきて、もとの農作業に従事した。

6. 力石を持ち上げる方法

イ. 正式の持ち上げ方

両方の手を力石の長径の両端にかけて力石を持ち上げ、かかえて胸まで挙げ、次いで肩に担ぐ。

力があり、また馴れている人は、胸のところまで休まないで担ぐが、力のない人や馴れていない人は、一旦、胸のところで、ひと呼吸してから担ぐという。

ロ. 初心者の練習方法

重量の軽い力石から、徐々に重い石に移つて行くのは当然のことであつたろう。手掛りのない、丸い力石を持ち上げるのには、力だけでなく、熟練することが必要であり、初めて石を持ち上げる者にとっては、非常に困難な技術であつた。

そこで、縄を輪にして、力石の下に当て、両手で輪になつた縄を持つて持ち上げる動作を繰り返えし行ない、臂力を養成すると同時に、力

石を胸まで上げるこつを憶えるようにした。

長沢部落の仲野氏は「初めての頃は、縄を輪にして、力石を持ち上げたものだ」と語っている。

7. 「力持ち」を行なつた時期

力持ちを行なつた階層が、農作業の実際上の担当者であつた男衆であつたことから、農作業の労働内容と関係があつたろうとは、当然考えられる。

『農民や下級町人などの庶民階層にあつては、みずからの慰みや娯しみの場を信仰祭儀に因んだ年中行事などに求めた。しかも、それらは、生産労働の終始に関係していることは注目値する（中略）こうした年中行事のなかに芸能や相撲、力くらべなどの競技的なものがありこまめ慰安娯楽という意味ふかい一面が加わつていた。これらは地方によつて若干の差異をみながらバラエティーにとみ実に多くのものが盛んにおこなわれた。』

しかし、元来は信仰的な社寺祭礼と結合したものであつたし、さらにそれらは生産労働商業と強い関連性をもち、ことに農耕作業の季節のプロセスのケジメ＝節として設けられた意義あるものであつた。（『徳川時代からのおもてなしにみるレクリエーションについて』桃山学院大学三辺光夫）

北淡路の場合、「力持ち」の行なわれたのは、「八十八夜」の日から8月1日、所謂「八朔」までの期間であつた。それは、八十八夜の頃になると野良仕事が忙がしくなり、また夜が短くなつて、今までやつていた夜業から解放され、昼間の農作業だけになるからであり、八朔になると、秋の夜長になつて夜業が課せられるようになつて、夜遊びができなくなるからであつた。

長い夏の日の夕刻、農作業から解放された男衆たちは、三々伍々、部落の若者の集会所や社寺の境内に集つて、力石を持ち上げて力競べをしたり、新入りの者たちは力石を持ち上げる練習に励んだ。男衆の古参者や年長者が、年令の若い男衆に、力石の持ち上げ方や担ぎ方を教え

たのも、このような時であつたろうし、長沢部落の金山比古神社や大師堂の力石などはこのような練習や稽古の時に使われたものであつたろう。

8. 「力持ち」の競技会

淡路島では、大正の末年頃まで部落、村落から選ばれた地区代表の力持ちたちによつて、全島的な力持ちの競技会が行なわれたというが、部落内の力持ちの代表を決定する過程を除いては、果して、このような大がかりな競技会が行なわれたとかという点に関しては、資料も記録もなく不明な点が多い。

部落の力持ち代表決定に際しては、平素の力競べなどによつて、力持ちの格づけがなされていたということであるが、文書に書いたもの、即ち番附はなかつたという。若し、番附が発見されたならば、力持ちの解明のための貴重な資料となることであろう。

9. 力石による力持ちの衰退の要因

力持ちの衰微の原因としては種々の要因があつたろうが、主なものとして、次の3つが挙げられるであろう。

イ. 淡路の農業形態の変化

明治維新による封建制度の崩壊により、農奴的な男衆という下男制度がなくなつたこと、特に戦後は、農地開放による地主階級の没落は、農業の自家経営が本すじとなつて、男衆は存在しなくなつた。そのため、力持ちの競技は、その担い手を失つてしまつた。

ロ. 農作業の機械化

農作業だけに止まらず、運搬その他の労働作

業の機械化、動力使用は、単純な力を必要とする作業を駆逐してしまつた。

ハ. 農村娯楽の変化

交通機関、放送網の発達、僅かの時間で娯楽を求めることができ、部落内だけの閉鎖的な、素朴な青年会の集会や生活に直結した泥くさい力競べ、力持ちのような競技は顧みられなくなつた。

10. 北淡路における力石の保存状況

北淡路の各地に存在する力石は消滅寸前にある、といつてよい。

材質が、堅牢な石であるがために風化を免かれ、重量があるために移転、運搬、盗難をまぬかれて、神社、仏閣の境内に放置されながらも、ひっそりと存在を許されている。

住民の間でも、力持ちが話題になることもなく、力石に関心を払うこともなく、力石の何であるかということも全く知らない。

江戸時代から、庶民に親しまれ、汗みどろになつて若者たちが取り組み、挑んだ力石は、やはり、封建時代の下積みの若者たちの記念碑としてでも保存の手段を講じるべきであろう。

参 考 文 献

児玉幸多「近世農民生活史」(新稿版)

吉川弘文館 昭39年7月, P168. P177. P342.

津名郡神社総代会「津名郡神社誌」

津名郡神社総代会 昭和39年9月

三辺光夫「徳川時代からの大阪にみるレクリエーションについて」 昭和40年